

## 横浜市新市庁舎建設予定地埋蔵文化財発掘調査見学会

【洲干島遺跡(本町6丁目～北仲通6丁目地区)】

主催：横浜市総務局管理課新市庁舎整備担当

協力：公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

\***A**～**G**は、裏面参照

この発掘調査は新市庁舎の整備に伴う事前調査として実施しているものです。

遺跡の名称に冠している「洲干島(しゅうかんじま)」は、江戸時代にこの辺りを洲干島と呼んでいたことに由来します。洲干島の先端には象が鼻と呼ばれる砂州とその南側に洲干島弁天社がありましたが、安政6年(1859)の開港後に幕府によって、本町通り、弁天通り、北仲通り、南仲通り、海岸通りの5つの道が整備されて以降、これらの通りに沿って市街地が形成されていくようになりました。

明治元年には、北仲通の北側に燈明台掛(燈台局)が神奈川県所属として発足し、明治3年に工部省が設置されるとともに、燈台寮として灯台の資材作成ならびに試験などを行なっていました。また、南側には横浜商法学校(後に**G**本町小学校)など学校関係の建物が多く建てられていました。

一方、本町通り沿いには大資本の貿易商や両替商などが店を構え、明治の中頃以降には銀行や運送業、旅館などが多く建っていました。関東大震災直前の本町通6丁目には、**C**横浜銀行集会所(明治38年築)、原合名会社アパート(明治39年築)などがあり、2つの通りに挟まれ大岡川に面して**B**横浜貿易新報社(大正11年築)が建っていました。

今回の調査では、震災で崩壊した横浜銀行集会所、原合名会社アパート、横浜貿易新報社、本町小学校、燈台寮の倉庫などの建物基礎のほか、**D**下水排水の陶管(いわゆる土管)、雨水枡などの遺構が出土しています。また、江戸末期に築造されたと考えられる大岡川の**A**旧護岸の一部も出土しています。



赤線が発掘対象範囲(明治15年測量迅速測図を加工)

明治時代の建物基礎の下からは、建物の基礎を支えるものとは別と思われる**E**松杭の列が数か所で確認されており、その中の一部には臍(ほぞ)を作り横板を渡している**F**木組みも確認されています。

これまでに調査対象面積の約60%を調査したところです。今後は残る東側部分の調査を行なう予定ですが、これまでの調査から、主に関東大震災以降の建設工事などで除去されなかった、被災倒壊した明治時代の構造物などが存置されていると考えられます。





敷地西側の発掘調査状況（11月12日時点）



A 江戸末期の石積み旧護岸



B 横浜貿易新報社新館（震災により倒壊）



C 横浜銀行集会所（震災の影響を受けた土間床）



D 集会所裏の下水排水（大岡川に放流）



E 数か所で松杭の列



F 臍作りの木組み



G 本町小学校の基礎

埋め戻す前の発掘調査状況（敷地東側の調査を行うため、一部を埋め戻した）